

## スペイン演劇の翻訳をめぐるジェンダー — 言語構造と20世紀のスペイン社会から考える —

岡本 淳子

発表者はスペイン演劇を日本語に訳す際に登場人物を過度に脚色することは避けようと心がけている。脚色するのは演出家に任せればよいという考えである。しかしながら、今回、「翻訳からみたジェンダー」というパネル・ディスカッションでの発表のために自身の翻訳を見直した際に、登場人物のセリフにいわゆる「女ことば」や「男ことば」を使用していることに気づいた。本発表では、まずスペイン語の言語的特徴、そして20世紀のスペイン社会における性差別を確認し、最後に、3つの演劇作品の翻訳に見られるジェンダーを分析する。

スペイン語には日本語のような女性言葉はない。しかし、「他のロマンス諸語と同様、文法上の性をもち、すべての名詞が男性・女性に分類される。この文法上の性の存在意義は名詞と冠詞・形容詞、それを受ける代名詞との呼応にあるとされる」(糸魚川、2005、85)。したがって、スペイン語を日本語に翻訳する際にその性別に無自覚でいることはできない。

次に、20世紀のスペイン女性の立場について歴史的に考察する。スペインでは1936年から39年までの内戦後、1975年までフランコによる独裁制が敷かれる。フランコのスペインはカトリックの教義を重んじ、男尊女卑の教えを普及させた。当時のスペインの唯一の政党であるファランヘ党の女子部が1953年に『よき妻の指南書 — あなたのご主人を幸せにするための11の規則』を各家庭の女性に配布し、挿絵付きの本冊子が独裁体制下における理想の女性像の徹底に尽力した。このような社会背景も少なからず翻訳者に影響を与えている。

作品分析で最初に取り上げるのは、1979年にスペイン・フェミニスト党を

立ち上げたリディア・ファルコンの『奥さん、邪魔をしないで、黙ってお支払ってください！』（1984）である。1975年にフランコが死去し、独裁制は終わったが、スペインが民主主義国家として機能するにはおおよそ10年の移行期を要した。本作では独裁制終焉後も抑圧され虐げられる三人の女性、夫のドメスティック・バイオレンスを警察に訴えにくる女性、夫の浮気を理由に離婚申請をするために弁護士事務所を訪れる女性、不倫関係にあった妻子持ちの男性に捨てられ、精神的に不安定になり心療内科を受診する女性が登場する。警官、弁護士、医師という権威ある職につく男性と、男性によって身体的・精神的に傷つけられた女性とのやりとりを日本語に訳す際に、ジェンダーがどう反映されているのかを分析する。

次は、ファン・カルロス・ルビオの『アリゾナーアメリカのミュージカル悲劇』（2005）を取り上げる。本作は実際にアメリカ市民がメキシコからの不法移民を取り締まるために作った自警団「ミニット・マン・プロジェクト」をヒントに執筆された。本作には一組の夫婦しか登場しない。念願のプロジェクトに参加し、灼熱のアリゾナで任務を遂行しようと躍起になる夫と、夫に同行したもののプロジェクトの目的を理解できていない妻の対話が、次第に夫婦関係を変化させる。最後には夫が妻をライフル銃で射殺し、直後に夫も自殺するという悲劇である。亭主閑白で支配的な夫と従順な妻の会話には多くの「女ことば」と「男ことば」が用いられたことを確認する。

最後はヘスス・ガルシア・カンポスの『そして家は成長していき…』（2016）を分析する。大邸宅を格安の家賃で借りる代わりに大量の美術品の管理と清掃に従事することになり、際限なく増え続ける品物に閉口する夫婦の物語である。二人は農林省に勤める公務員であり、対等な関係を築いている。夫は先物取引などに興味を持ち、夢想家である一方、妻は現実的である。そのような夫婦の会話は2つ目の作品『アリゾナ』の夫婦のものとはかなり異なる日本語で構成されている。

発表者が自身の訳語を分析するという面白い試みになった。結果として、日本語訳に表れるジェンダーは、その人物たちの関係性によるところが大きいことが明らかになる。

[引用文献]

- Campos García, Jesús (2016) ...*Y la casa crecía*, Madrid, Centro Dramático Nacional.
- Falcón, Lidia (1998) *¡No moleste, calle y pague, señora!* Patricia W. O'Connor (Ed.), *Mujeres sobre mujeres: teatro breve español*, Madrid, Editorial Fundamentos, 145-169.
- Rubio, Juan Carlos (2009) *Las heridas del viento/Humo/Arizona*, Madrid, Editorial Fundamentos, 125-157.
- Guía de la buena esposa. <<http://www.rehueong.com.ar/sites/default/files/Gu%C3%ADa%20de%20la%20buena%20esposa.pdf>> (最終閲覧日：2021年11月15日)
- 糸魚川美樹 (2005) 「ジェンダー化された言語のゆくえ」『社会言語学』V, 「社会言語学」刊行会, 85-103.
- ファルコン, リディア (2020) 『奥さん、邪魔をしないで, 黙ってお支払ってください!』(岡本淳子訳) *Estudios Hispánicos* 44号, 大阪大学外国語学部スペイン語部会, 29-40.
- 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおけるジェンダーフィルター — 文末詞(終助詞)使用実態調査の中間報告より —」『日本語とジェンダー』第5号, 日本語ジェンダー学会, 23-46.
- 水本光美・福盛寿賀子 (2007) 「主張度の強い場面における女性文末詞使用 — 実際の会話とドラマの比較 —」『北九州市立大学国際論集』第5号, 北九州市立大学, 13-22.
- ルビオ, フアン・カルロス (2019) 『アリゾナ — アメリカのミュージカル悲劇』(岡本淳子訳) *Estudios Hispánicos* 43号, 大阪大学外国語学部スペイン語部会, 29-56.

(おかもと じゅんこ・大阪大学准教授)